綴葉（ていよう）

'26 1 2

No. 444

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

アシル・ンベンベ著『ネクロポリティクス　死の政治学』

西本千尋著『まちは言葉でできている』

特集／人と馬

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階

Tel:771-6211 ／ E-mail:ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

今や自由民主主義の核心を構成しているのは憎しみである

ネクロポリティクス 死の政治学

アシル・ンベンベ著
岩崎稔・小田原琳訳
人文書院

ガザでの虐殺、ウクライナへの侵略戦争、世界中で壊を切ったように溢れ出した外国人恐怖症（ゼノフォビア）……まるで底が抜けたような社会。国境は今や〈他者〉を遠ざけておくための、分断の線としての側面を露わにしている。戦争は必然となり、治療薬（ファルマコン）にして毒薬となった――**民主主義からの退出**が今まさに起こっている。いかにして社会が分断と憎しみの渦巻く世界を作り出すにいたったのか、ンベンベはフーコーやファノンの思想を継承しながら、自身の出身地であるアフリカに視座を据え、現代社会の問題の諸相を浮かび上がらせる。

その成立過程からして奴隷制および植民地主義と不可分であった民主主義社会は、そもそもが分断を抱え込んだものだった。西欧世界で自由と平等が目指されていくその背後で、外部化された領域は暴力と死で満たされていたのである。ンベンベはこれを民主主義の**夜の身体**と表現する。植民地帝国と奴隷制国家のもと、分割し、外部化し、押し込め、死に晒し、虐殺する。植民地とは他者を法の外部で破壊する領域であり、外部化された暴力は民主主義社会の内部では秘匿され続ける。しかし現代においては、そのようにして共同体の内部を聖域化することはもはやできない。代わりに、「望ましくない人びと」の世界を消去すること、分離壁を築くことへの衝動が、人びとを駆り立てる。このような**アパルトヘイト願望**あるいは**絶滅幻想**が、今日の世界を決定づけているのである。敵を求め、社会全体がレイシズムや陰謀論に絡めとられていく様相を日々まのあたりにしている我々からしても、これは決して他人事ではない。

そして第三章で考察するのが、戦争や植民地主義的占領がいかなる権力の働きと共にあるのかという問題である。彼はフーコーの「生の政治」を「誰が生き、誰が死ぬべきかを決定する権力」と理解し、生の管理ではなく、他者を死に晒す権力の在り方に焦点を据え、そこから**ネクロポリティクス（死の権力）**という概念を提示する。その歴史的過程としてプランテーションやナチズムにも目を向けつつ、特に注目するのがアパルトヘイト体制のアフリカ、そして現代のパレスチナである。ただし、ンベンベも生の政治という概念を否定しているわけではない。実際、彼は後期近代の植民地占領の特徴を、規律訓練、生の政治、死の政治という三つの権力の結合にあると述べ、孤立化し、細分化し、徹底的に支配するパレスチナの統治体制を暴き出す。ネクロポリティクスとは、生が死の権力に隷属させられ、人びとが破壊されている現代世界において、「生の政治」だけでは捉えきれない諸相を把握するための概念なのである。

現代の社会の根底にあるのは憎しみであると、ンベンベは本書で繰り返し説いている。レイシズムやテロルに満ちた憎しみの世界を克服することはできるのだろうか。苦難に満ちた治癒の過程を歩むことができるのだろうか。アフリカという地球の「内腑」から紡がれる彼の言葉をどう受け取るか、私自身も問われている。（**猫足**）

（三四〇頁　税込四九五〇円　10月刊）

わたしたちの「まち」をとりもどすための言葉

まちは言葉でできている

西本千尋著
柏書房

古びた商店街、街角の銭湯、駅前の風景。私たちが何気なく日常を過ごしているまちは、常にうつり変わっていく。道路が拡幅され、新しい商業施設やマンションが建つ。地区全体が再開発されることもある。こうしたまちの変化は、ある日突然に起こるのではない。そのまちを生きる人びとの経験や記憶、そして思い入れがある一方、行政や民間のデベロッパーによる様々な思惑もある。これらが寄り集まって、都市計画や条例、もしくは住民による陳情といった「言葉」として明文化され、空間を変容させる大きな動きになる。

本書は長年まちづくりに従事してきた著者が、まちをとりまく「言葉」を読み解いていくエッセイ集だ。地区の再開発や貧困層向けの住宅供給、住民主導の景観保存、山村集落の将来像、災害からの復興。日本各地のまちづくりの現場を訪れた経験から、条例や制定された文章、そして文字にならない人びとの声を拾い上げる。

◆誰による、誰のための「まちづくり」？

著者は二十年以上まちづくりに携わってきた。今日の日本におけるまちづくりは「民主導」「官民協働」「特例」「規制緩和」を通して「オープンスペースの創出」「市民参加」「アクティビティの創出」を行うものだという。つまり、あるべきまちの姿にするために、都市計画で定められた空間の用途や規制を書き換えるということだ。たとえば樹木の伐採が問題となっている神宮外苑の再開発では、「公園」として定められていた区域の一部を「再開発等促進区」に指定することで、商業・オフィスビルの建設が可能になった。

著者はさまざまな事例を通じて、それが誰のためのまちづくりかを問う。都市計画や条例の条文にあらわれる「人々」「誰もが」といった言葉は、従順な消費者のみを想定しているのではないか。行政や民間デベロッパーが「住民の声」をきくための場を設けたとしても、そこに参加するだけの余裕がある、一部の人の声のみを聴いてはいるのではないか。高齢者や妊婦、外国人、ホームレス、まちの経験は人それぞれだ。しかし、そもそもまちに出てくることが困難な状況に置かれている人びとは、まちづくりにおいていない者として扱われてきたのである。

本書に通底する都市計画への批判は真新しいものではない。資本による空間の占有はルフェーブル『**都市への権利**』からの長年の都市論の主題であり、近年だとカーン『**フェミニスト・シティ**』は男性中心的な都市計画と女性の都市経験について議論している。だが著者はこうした議論を借りることはしない。代わりに本書は、生活者としての実感や、その地に暮らす人びとの声を描くことで、まちについて考え、語るための語彙を渡してくれる。わたしたちも、自らの暮らすまちについて言葉を繋いでいけるだろう。（**たいやき**）

（二一六頁　税込二二〇〇円　10月刊）

ナルニア国物語５　馬と少年

C･S･ルイス著
小澤身和子訳　新潮文庫

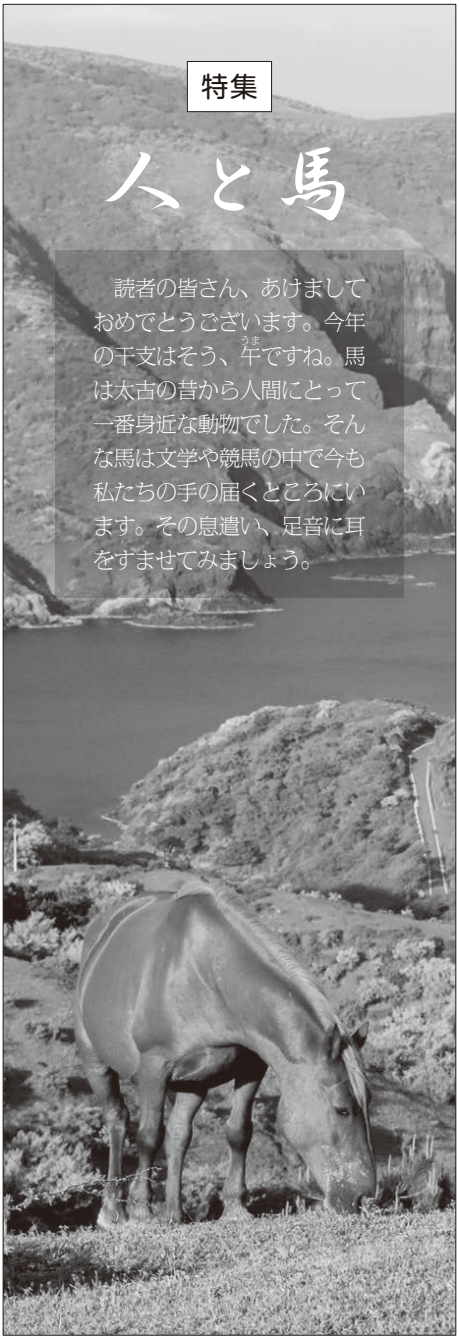
馬が人間の良きパートナーになり得ることは知られている。だがいつも人間が主人とは限らないだろう。本書原題 *The Horse and His Boy* はそれをよく示している。

全７巻にわたる「ナルニア国物語」の第５巻、年代順だと３番目の物語にあたる本書の主役は、〈もの言う馬〉ブリーと少年シャスタ。現実世界から異世界ナルニアへ入り込むことで始まる普段の物語とは異なり、向こう側の世界のみで物語が完結する本書は異色の外伝と位置づけられている。

さて、ナルニアに敵対する国カロールメンに暮らすシャスタは、ある日自分が奴隷として売り飛ばされようとしていることを知る。ここから逃げるか留まるか、馬小屋で悩むシャスタに相談できる相手はいない。そんなとき、「しゃべれるぜ」と突然声をかけたのが馬のブリーである。ブリーは自分がかつて自由な馬、ナルニアの馬であったことを伝え逃亡を持ちかける。そうして少年を盗んだ馬は、馬に乗ったことのない少年と共に北へ、ナルニアへと走り始める。

旅を通した子どもたちの成長は児童文学の醍醐味の一つだろう。本書で馬が重要な役割を果たすことは言うまでもない。ブリーは道すがらシャスタに乗馬を教える。馬具の付け方から鞍上での姿勢の正し方までその描写は詳しい。シャスタはついに「この子は真の馬乗り［…］きっと高貴な血が流れている」と言われるほどに成長する。ここでは乗馬術の習得がすなわち（のちに王となる）少年の人間としての成長として語られる。加えて馬のブリーも大きな成長を遂げるのだが、これもまた本書の魅力だろう。そこには共に旅をし学び合う対等な関係が確かにある。（**ひるね**）

（288 頁　税込 781 円）



読者の皆さん、あけましておめでとうございます。今年の干支はそう、午（うま）ですね。馬は太古の昔から人間にとって一番身近な動物でした。そんな馬は文学や競馬の中で今も私たちの手の届くところにいます。その息遣い、足音に耳をすませてみましょう。

ポータブル・フォークナー

ウィリアム・フォークナー著
マルカム・カウリー編、池澤夏樹他訳　河出書房新社

「**コンプソン祖父さまが亡くなるまで僕たちは毎週土曜の午後に農場に遊びに行った。昼ご飯を食べるとすぐ二頭馬車に乗って出かけた**」――と、この本は始まる。私たちは馬に引かれてヨクナパトーファ郡へと入ってゆく、、、。隣にいるクエンティン・コンプソンとともに我々が聴くのは、そこがまだ原野だった頃の話。これが本書に収録された第一作、「正義」。本作品集は舞台となる時代順に並んでいるから、その一番はじめ、一八二〇年の話だ。

ここからフォークナーが創造したヨクナパトーファ郡の歴史を辿ってゆく我々は、同時に馬と人間の関係の変化の歴史も目にすることになる。二作目の「郡庁舎」では、集落と外界をつなぐのは、郵便を持って現れる馬上の役人ただ一人。監獄からの脱走事件を機に郡庁舎が建てられ、集落は町になる。ジェファソンと名付けられる。後景には、荷運びにも移動にも、いつも馬がいる。一八三三年。

そして、南北戦争。プランテーションと奴隷制を基盤にした南部は崩壊し、再建の時代が始まる。一九〇八年、中編「まだら馬」。町を牛耳りはじめたスノープスがある日、まだら模様の馬たちを連れて帰ってくる。馬の競売が行われる。馬は投機の対象になった。しかし、まだら馬たちは囲いを破って脱走する。

最後の作品ではついに、一九五一年にたどり着く。ジェファソンはもうすっかり、近代化された町になっている。車の時代。馬車でやってきた我々は最後「**道路標識とガソリンスタンドを頼りに元来た道を高速道路まで戻り、合衆国に帰ってゆく**」のだ――とはいえ、そんな我々を、まだら馬の子孫たちが木陰から眺めているかもしれないが。　（コーク）

（864 頁　税込 6490 円）

すべての美しい馬

コーマック・マッカーシー著
黒原敏行訳　ハヤカワepi文庫

馬はどこかしら厳かなものをその身に宿している。この世界の真理はすべて平原を駆ける馬たちが知っている。この小説を読むたび、そんなことを思う。

本書は、アメリカ文学の巨匠コーマック・マッカーシーの出世作にして代表作である。馬とともに家出した少年ジョン・グレイディの青春と恋、そしてそれらをすべて呑みこむ暴力と挫折――。マッカーシー作品を特徴づける、どくどくと流れる血のように綴られた息の長い文体は、本書でも健在だ。そこでは人間の心理描写が意図的に排され、訳者の黒原敏行によれば〝人間〟が特権化されていない。世界は人間に対して容赦せず、人間は世界に対してちっぽけだ。

本書の場合、代わりに主役となるのは、まさしく馬たちである。少年たちは馬のために行動し、馬によって救われ、馬のせいで傷つけられるのだ。作中で馬たちは、異様な存在感を放っている――**ジョン・グレイディが両膝ではさむ肋骨の穹窿の内側では、暗い色の肉でできた心臓が誰の意志でか鼓動し血液が脈打って流れ青みを帯びた複雑な内臓が誰の意志でか蠢き頑丈な大腿骨と膝と関節の処で伸びたり縮んだり伸びたり縮んだりする亜麻製の太い綱のような腱が全て誰の意志でか肉に包まれ保護されて、蹄は朝露の降りた地面に穴を穿ち頭は左右に振り立てられピアノの鍵盤のような大きな歯の間からは涎が流れ熱い眼球のなかで世界が燃えていた。**

これは極端な例だけれども、小説はこうして馬を、ひいては世界を高密度に描写してゆく。少年に最後まで寄り添うのも馬たちだ。理不尽にまみれたこの底知れない暗闇のなか、ただ馬だけが美しい。　（水炊き）

（504 頁　税込 1166 円）

馬・車馬・騎馬の考古学
東方ユーラシアの馬文化
諫早直人／向井佑介編　臨川書店

新年一発目から骨太な本で恐縮だが、人と馬の関係を探るうえでは外せないと断言できる一冊だ。

京都大学人文科学研究所の三つの共同研究を下敷きとした本書は、副題の通り東方ユーラシア（モンゴル、中国、朝鮮半島、日本）のさまざまな馬文化――家畜化・馬具の伝播、供犠、管理体制などなど――を考古学の知見から詳らかにしている。

特に興味深いのは、乗馬のキーアイテム鎧（あぶみ）（乗馬の際に足を掛けておく道具）の出現と、その西への伝播である（第6章）。馬具の中では数少ない東アジア起源のものとされる鎧は、西暦300年前後に中国（西晋）で考案された後、100～200年を経て朝鮮半島南部・日本列島へと伝わった（実は、日本は世界で最初に大陸の外へ鐙が伝わった場所なのである）。

鐙が馬具の中でも重要なのは、それが乗馬の安定性を確保したことにある。誰もが簡単に馬に乗れるようになったことで、乗馬層の拡大と、それに伴う家畜馬の増加を、のちの東アジアの国々にもたらした。つまり鎧は、乗馬・騎馬のあり方を根本から変えたとさえいえるのだ。普段競馬でおなじみのあの道具（そうでない人もいるかもしれませんが）がまさかこんな歴史を経ていたとは、と先人の創意工夫に思いを馳せるばかりである。

もちろん、本書の魅力はこれに尽きない。モンゴル人が馬のどの部位を神聖視していたか、スキタイ人が騎馬をどう飾りつけていたか、日本の馬がどんな塩を舐めていたか……その射程はきわめて広い。写真や絵も豊富で、東方ユーラシアの馬の博覧会カタログとしても楽しめる一冊。　（倉井）

（312頁　税込3520円）

エピタフ幻の島、ユルリの光跡
岡田敦著
インプレスブックス

アニマルウェルフェアという言葉がある。例えば、競走馬の在り方に関しては批判が多い。ただそもそも、馬という動物の置かれている立場は、極めて微妙なものだ。犬猫のように、ペットとして飼われているわけでもない。家畜として使われることも、もはやほとんどない。純粋な野生馬はもうすでにいない。

「純粋な」が意味するところは、かつて飼育下にあった馬が自然に還ったケースは存在する、ということだ。北海道は根室岬の東側に位置する無人のユルリ島にも、そんな馬たちが暮らしている。かつて人が住んでいた頃、家畜として飼われていた馬たちの子孫である。

本書はユルリ島をめぐる歴史、写真家である著者がそこで納めた写真、そして（これが読んでいて最も面白かったのだが）かつて島に住んでいた人や島の関係者へのインタビューから成り立つ。戦後に昆布の干場を求めて島に移った人々は昆布干しに使うための家畜として馬を島に持ち込んだ。しかし、根室で干場が整備されると、不便な島に住む必要はなくなる。本土に連れ帰っても用途のない馬は、餌となる草や水も豊富な島に残された。

ユルリ島の歴史は人と馬の関係を象徴するものに見える。人馬一体という言葉もある程に、我々は共に暮らしていた。しかし、時代は変わってしまった。人間がいなければ生まれてくることのない馬たち。「人間ぐらい悪いやついないから」とかつての住民は言った。馬が被る全ての悲惨の原因は、人間にある。

現在、ユルリ島に住んでいるのは数頭の牝馬のみである。死に絶える運命を待つ儚い存在でありながら、写真に写る彼女らの姿はどこまでも美しい。　（荒砥）

（240頁　税込2970円）

「地方」と「努力」の現代史
アイドルホースと戦後日本
石岡学著　青土社

現在第二期放送中のアニメ「ウマ娘　シンデレラグレイ」の主人（？）公は芦毛の怪物・オグリキャップ。当時の若手騎手・武豊を名実ともにスターの座に押し上げたこの名馬は、まさにアイドルホースの称号を得るにふさわしい。私たちはターフを舞台に繰り広げるドラマに魅入られる、いや、**私たちは自らの叶わぬ夢と物語を競走馬に仮託している**と言うべきか。

さて、本書に出走するのは地方競馬出身という共通項を持つハイセイコー、オグリキャップ、ハルウララ。本書で描かれるのはこの3頭のアイドルホースをめぐる人々の記憶の構築と変遷の過程である。著者・石岡（京大人環の教育社会学の先生だ）曰く、“過去を振り返るとき、常にその視点は現在地からのものである。だから、**過去を振り返るという行為は、実際は今自分がここにいることの理由を探す行為である**”。となれば、私たちが名馬に託す物語もまた、ひとつの集合的記憶として時代状況を反映していよう。

新聞や雑誌記事の分析を通して進む本書だが、そこに浮かび上がるのは「地方出身馬が不遇な環境を乗り越えて努力し、中央のエリートを薙ぎ倒す」という立身出世の物語だ。それは同時に日本社会における「頑張れば報われるはず（だった）」という願望（幻想）のネガでもある。馬が過去のものとなるにつれ、事実の細部は忘れさられ、馬への共感は収まりの良い「正史」へと収斂されていく。

もの言わぬ競走馬が自身に課された物語をどう思うのかはわからない。が、幻想であると知りながらも、ゴールの瞬間を見届け、声援を送るくらいの誠実さは許されるだろうか。物語ることは人の業なのだから。　（**浅煎り**）

（307頁　税込2640円）

競馬にみる日本文化
石川肇著
法蔵館

目次を開くと、興味をそそるタイトルの上に付された番号が目につく。1、2は白、ついで黒、赤、青、黄、緑……と、なにやら見覚えのある配色。競馬から読み解く文壇史をつづったエッセーたちがさながら出馬表のように並び、思わずレース展開を予想したくなる。

本書は『週刊Gallop』エッセー大賞受賞を機に始まった連載をまとめた一冊。無類の競馬好きであり文学研究者でもある著者は、何もレースと配当金が競馬のすべてではないと語る。「馬の近況や過去データを読んでいて、何か引っかかるものがあれば、やはり大概問題があって、がむしゃらに追究することになる。わたしはそこに文学研究との共通点を見出しており、また競馬を文学だとも思っている。人と馬とが紡ぎ出す多種多様なドラマは、観戦者の心をつかむ“文学的な力”を持っている」。本筋からは逸れるが、エッセーにはそんな著者の研究者としての横顔も覗く。作家の親族から聞くよもやま話に、偶然資料が手に入ったときの喜び……整えられた論文の舞台裏に心くすぐるドラマが隠れているのも、競馬との共通点だろうか。

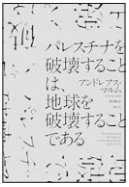
さあ、レースの始まりだ。本命は著者の専門でもある“馬主文士”舟橋聖一の馬産物語？　いやいや、寺山修司と愛馬ユリシーズの劇的な出会いも負けていない。殺人ならぬ殺馬ミステリーという変わり種や、海外からフランスの画家ラウル・デュフィも参戦。大穴は「デタラメに買えばいいのだ」なんて調子の赤塚不二夫だろうか。後半戦では、「大正の広重」吉田初三郎の鳥観図で今はなき競馬場をめぐる。どのエピソードがあなたにとっての一着になるだろうか？　（**くたくた**）

（160頁　税込2200円）

新刊コーナー

パレスチナを破壊することは、地球を破壊することである

アンドレアス・マルム著
箱田徹訳　青土社



いまガザでは、人間の生と、生を維持するための環境が、イスラエルによって徹底的に破壊されている。なぜ、これほどの暴力に米国と英国は武器を供与し加担するのか。マルムが本書で明らかにするのは、パレスチナの破壊が、化石燃料を中心に動いてきた世界秩序が生み出す暴力であり、その秩序がいま、ガザだけでなく地球そのものを危機へと追い込んでいるということだ。

ガザへの爆撃が国際法や倫理を素通りしていくように、化石燃料の増産もまた、科学的警鐘や国際合意を超えて拡大している。マルムはこの無制限の破壊の起源を、一八四〇年のアッカー海戦に見いだす。英国が初めて蒸気船を投入したこの戦争は、化石燃料を確保する軍事力と、それによっていっそう強化される化石燃料の相互依存を生み、中東の土地と人びとを支配の網の目に組み込んだ。パレスチナへの入植植民地主義も強められ、土地を居住不可能にする暴力として継続してきた。同様の居住不可能化の暴力は、気候変動により地球規模で進行している。このようにパレスチナの破壊と地球環境の破壊は同じ歴史の中で生まれた二つの暴力として浮かび上がる。

パレスチナの破壊は遠く離れた問題ではない。その延長線上にはわたしたちの未来がある。だからこそマルムは呼びかける。「パレスチナと地球の破壊を抑制し、阻止し、覆すには（中略）化石燃料インフラと入植植民地の破壊が求められる」のだと。　（たいやき）

（二三二頁　税込三三〇〇円　7月刊）

7

トリスタン・ガルシア著
高橋啓訳
河出書房新社

一大叙事詩というか、巨大な物語に圧倒された、そんな読後感だった。

本作は表題の通り、7つの小説が収められた作品集である。ただ短編集と言うには少し長い。何しろ単行本で二段組五百頁越えの分量なのだから。ただ著者のストーリーテリングは巧みで、すらすら読み進めることができる。この長さも苦にならない。

早い話、ここに収められているのは「世にも奇妙な物語」である。意識だけ若い頃に戻ることのできる薬、未来のヒットチャートが刻まれた木管、等々。そして二百頁以上ある最後の作品「第七」ではそれまでの作品との関連性が示され、本書全体がまとめ上げられる……ように見えるのだが、大どんでん返しが起きるわけではなく、全ての作品が綺麗に繋ぎ合わせられるわけでもない。あくまでそれぞれの作品は自律性を保っている。

それでは、本書の作品群に共通する一貫性とは何だろうか（短編集の書評を書く時はいつもこの点をどう表現するか困ってしまう）。「作品の一貫性は明白であり、とてつもなく一貫しているとさえ言える」らしい。本当だろうか？　そもそも一貫性を見出す試みというものがある種の欺瞞性を持つというか、牽強付会であるように思われることはしばしばある。さて、本書の場合はどうであろうか。

一作目の巻頭に置かれたエピグラフ「私は多数だ」。一作目を読んだあと、そして本書を通読したあとでは違った趣を見せている。このあたりにヒントがあるかもしれないし、ないかもしれない。　（荒砥）

（五二八頁　税込五二八〇円　8月刊）

クリスマスに捧げるドイツ綺譚集

E・T・A・ホフマン編著
遠山明子訳　創元推理文庫

フローエ・ヴァイナハテン！　クリスマスには、ちょっと不思議な物語を、それが昔からの定番だ。同じ創元推理文庫から『英国クリスマス幽霊譚傑作集』（夏来健次編訳）が出ているが、今回はそのドイツ版――というとだいぶ語弊がある。本書はロマン主義作家のE・T・A・ホフマンが、作家仲間のコンテッサ、フケーを誘ってクリスマス向けに編纂した作品集だ。原題は『子どものメルヘン』――そう、メルヘンなのだ。

たとえばバレエでおなじみの「くるみ割り人形」。クリスマスの市民家庭を舞台に、幼いマリーが、玩具の兵とねずみの群れの闘争にまきこまれていく。ここでは子どもの素朴な感性のみに開かれる世界が、散文的な大人の世界と対置されている。ホフマンのもう一作「見知らぬ子」は知名度が圧倒的に劣るが、同様の姿勢に貫かれている。森で遊ぶ兄妹の前に不思議な子どもが姿を現わして共に遊ぶ。その過程で、木や小川が文字通り生命を宿し、彼らに語りかける。民衆の生活世界に息づく自然との全一性が綿密に練られたテクストの上で再構成され、詩的世界への通路となるのだ。それはコンテッサ「別れの宴」などにも通底している。幼い兄妹が森で出会った奇妙な住民たち――小人、水の精、鬼火、ハンノキの王など――が、父母の待つ客人の代わりに家を訪れ、どんちゃん騒ぎをまき起こす。

民間伝承に源泉を求めたメルヘンという芸術形式は、ドイツロマン主義を特徴づける独自の様式だ。その精神性が、そして面白さが、心ゆくまで味わえるだろう。――え、クリスマスなんてとっくに過ぎた……？　（猫足）

（三九七頁　税込一三二〇円　11月刊）

九年目の魔法【新装版】

ダイアナ・ウィン・ジョーンズ著
浅羽莢子訳
創元推理文庫

大学生のポーリィはため息をつきながら読みかけの本を伏せる。そして壁に飾った写真を見上げてまたため息。昔読んだ気がするこの本に、あるはずの物語が存在しない。この写真の中にいたはずの四人の人と馬も今は見えない。激しい喪失感がポーリィを襲う。どうして自分は「事実と合わないような記憶」を持っているのか――お葬式！　すべてはそこから始まっていたのではないか？

本書はここからポーリィの回想が始まる。九年前の十歳の頃、近所の葬式に潜り込んだときのこと。そこで仲良くなった歳上の男の人、トーマス・リン。二人は手紙をやりとりして「英雄稼業」の物語を紡いだ。スーパーを襲う巨人を撃退する英雄のはじまりや、英雄に相応しい馬について。すると手紙に書かれたことが次第に二人の目の前で起こり始める。どうしてこんなに大切な記憶を忘れてしまっていたんだろう……。あれは現実の出来事か、それとも単なる空想か。

物語は回想から現在へ。ちょうど『オデュッセイア』のように。失われた記憶と大切な人を取り返す手がかりはすぐそばにあったのだ。リンさんがポーリィに贈ったたくさんの本――『トムは真夜中の庭で』や『金枝篇』、『オクスフォード版バラード集』等々――すべてによって組み立てられた女王の魔法の緻密さには驚くばかりだ。

本書を開くとき、ポーリィのお祖母ちゃんならこう言うはずだ。「その前に、大きなティーポットにお茶をどっさり用意させとくれよ。どうやら長くなりそうだ」と。（ひるね）

（四九〇頁　税込一五四〇円　9月刊）

柳宗悦
美を生きた宗教哲学者
若松英輔著
NHKブックス

民藝の創始者・柳宗悦。技巧を凝らした高価な作品ではなく、廉価ながらも日常的な用途に適う品を雑器という。名もなき工人の無欲な手仕事から生み出された民衆の生活具に宿る美しさを柳は見出した。

——という功績ゆえに美術の文脈で言及されがちな柳だが、彼の思想的原点は宗教哲学にある（民藝はその延長線上で見出されたといった方が適切だ）。柳の信仰への問いはいかに民藝の美と出会うのか。批評家・若松は温かい筆致で彼の境涯を辿っていく。もとがNHKラジオのテキストとして編まれたというだけあって、入門書としても格好だ。

信と美が民藝という点で重なること。柳自身はかく語る。〝あの無心な嬰児の心に、一物をも有たざる心に、知を誇らざる者に、清貧を悦ぶ者たちの中に、神が宿るとは如何に不思議な真理であろう。同じその教えが、それらの器にも活々と読まれるではないか〟。難解な知識を持たぬ無心の帰依に救いがあり、技術の誇示も利欲もない無垢な器に美が宿る。柳の境涯は、信と美が融合した世界への祈りに貫かれていたといってもいいだろう。

同様の姿勢は言葉の美の在処についても言える。柳を「言葉の工人」と評する若松はこう述べる。〝言葉は、意味の歴史の貯蔵庫です。そこに一個の人間の経験をはるかに超えたちからが実在するのです〟——なるほど、本書は言葉への向き合い方をめぐる、若松と柳との時を超えた対話であったようだ。無欲な言葉、飾り立てぬ文章。最近の私は随分と忘れがちだったように思う。

（三四〇頁　税込一九八〇円　8月刊）

（浅煎り）

ULTIMATE EDITION
阿部和重著
河出文庫

阿部和重は現実と並走し続けている。そのマイルストーンが本書だ。なぜって、ここに出てくるのは我々がしじゅう目にしていた、ジャンクなものばかりだからだ。たとえば、ポケモンGO、インスタ、金正恩、グレタさん、嵐（自然現象じゃないほう）、コロナ、イーロンマスク、カルロスゴーン——どれも、ああ

あったよね、となるものばかり。「文学」的ではない。ミーム的、とでも言えばいいか。

作者は、ミーム的なテーマに対して、一段高いところから分析したり、共感をもとに自分の意見を開陳したりはしない。むしろ彼は、「文学」が無かったことにしてきた、もしくはしかつめらしい顔で向き合ってきたものと同じ土俵で遊ぶことを選ぶ。たとえば阿部が描く世界においては、グレタさんは未来からやってきたAI搭載ヒューマノイドロボットだし、酒に溺れた金正恩は夜な夜なドラえもんを違法サイトで視聴している。くだらない、といえばくだらないが、阿部和重はどこまでもくだらなくあろうとする。

シリアスなものもふざけたものも全てが一緒くたになって気づいたら忘れられている毎日にあって、文学が生き残る術は、クールにふざけ続けることにあるのかもしれない。脳裏に残る疾走感が、何よりの証拠だ。

しかし、本書において一つだけ惜しいことがあるとすれば、それは一編一編があまりに短いこと。もっと読んでいたいのに。ここに集められた現実の断片はどのようなビジョンのもとに配置されることになるのか、期待しながら待つほかない。

（三五二頁　税込一三九七円　11月刊）

（コーク）

現代誤情報学入門

ジョン・ルーゼンビーク／サンダー・ヴァン・ダー・リンダン著
加納安彦訳　日本評論社

情報が多すぎる現代。もう何が正しくて何が間違いか分からない。単純な真偽だけでなく、そこに悪意も入ってくるから実に厄介である。本書は誤情報の問題性や原因、対策を徹底的に検証する。

一口に誤情報と言っても、フェイクニュースとか陰謀論とか色々なものが含意されているので包括的な定義は難しい。本書では誤情報を「意図や情報源に関わらず、虚偽または誤解を招く情報」と定義したが、それに至るまで二十頁に及ぶ検討をしている。それでいてまだ「完全とは言えない」としているのだからいかに繊細な問題であるかが分かる。

前半では誤情報の問題性や拡散の原因について述べられている。たとえばエコーチェンバー。こちらも様々な定義が提案されているが、似た考えの人々がやり取りをして信念を強化する閉鎖的な空間のことである。それがどの程度の問題を孕んでいるかを多角的に検討する。また本書の役割はあくまで主張の紹介であり、判断は読者がすべきだというスタンスも他書と一線を画すものになっている。

後半では誤情報に悪影響を受けないための議論がなされている。悲しいことに万能薬はないようだ。様々な介入策やトレーニングが検証されているが上手くいかない。もしかするとそういう限界を理解することが一番の対策なのかもしれない。

本書では専門用語の使用が控えめになっており、また至る所にジョークが散りばめられている。著者の膨大なリサーチとユーモアがつくる情報社会の必読書。（竹輪）

（二八八頁　税込三七四〇円　9月刊）

生成AI×ロボティクス

南谷奉良編、中村靖子監
春風社

AIに苦手意識がある。古典的な方法で文学を研究しているからだろうか。友達のようにAIに接する人を見ると何となく薄ら寒いものを感じる。自分とは無関係な領域で技術が急速に進んでいくことに焦りと不安がある。人文学とAIはどのように接点を持ちうるだろうか。そして、AIと〝友好的〟な関係を築くにはどうすればよいのだろうか。

この二つの疑問に答えてくれたのが本書だ。学際的な研究プロジェクトの成果を発信する叢書の第二巻で、理論篇、応用研究篇、文学作品の読解篇の三部から成る。話題もロボットの主体性、メンタルヘルスケアへの活用、テキストマイニングを用いた文学研究など多岐にわたるが、いずれも数十年後に訪れるであろうAI・ロボットとの共生社会を見据えた研究である。

ますます技術が発展し、AIやロボットがもはや道具ではいられないことは明らかだろう。効率的に役に立つことを突きつめるほど、主体性や自律性を望まれ、言うなれば、人間に近づいていく。新たな知的存在と共に生きるうえで、何が障害となり、どんな社会規範が必要とされるのか。これらの問いは、私たち自身がどのように社会と関わり、感情や身体をどのように捉えているかという問いに通じ、つまり、人間を定義することと表裏一体である。これは伝統的に人文学が担ってきた領域だろう。本書ではとりわけ人間の弱さ・脆弱性が重要視される。AI・ロボットの探究とともに、他ならぬ私たち自身とその未来に向き合うための知見に富んだ一冊。（くたくた）

（二八六頁　税込四四〇〇円　8月刊）

増補　シュルレアリスム その思想と時代

酒井健著
ちくま学芸文庫

「一九二〇年代半ばにフランスで生まれ、それまでの西欧の近代文明を根底から批判し、新たな人間の可能性を提示した文化運動」――本書はシュルレアリスムをこう定義する。ここでの「近代文明批判」、それは同時に「戦争批判」でもある。一九二〇年代にシュルレアリストとして活躍した若者たちは、青春の大切な時期を第一次世界大戦に奪われた。ゆえにそこには、戦争をもたらした西欧近代文明への激しい怒りがある。

この怒りは社会を否定し刷新する「革命」の方向に向かうが、本書によればシュルレアリスムはもうひとつの方向を有していた。それが現実を気にかけずそこから離れていく方向、すなわち「放心」や「恍惚」といった方向である。本書はこの対極とも思える「革命」と「放心」という二つの側面から――バタイユを専門とする著者ゆえか、恍惚体験とそこに開かれる超現実に重きを置きつつ――シュルレアリスムの全貌に迫っていく。

本書で注目すべきは、アンドレ・ブルトンの矛盾や躊躇いに積極的な意味が見出されていること。自動記述に際して、完全に無意味な文章は良しとせず、文法を守り、推敲を重ねたブルトン。あるいは精神病者と交わる際、狂気に恐怖を感じつつ、さりとて狂気から完全に遠のいてしまうことにも耐え切れなかったブルトン。こうして「理性」と「狂気」の狭間で絶えず浮遊していたからこそ、ブルトンはあの「超現実」にたどり着いたのだと著者は主張する。対立する二項の「あいだ」、そこにシュルレアリスムの本質がある。（ぱや）

（四三二頁　税込一五四〇円　9月刊）

一歩前進、二歩後退

絓秀実著
講談社

日本の文芸批評家、絓秀実による最新の評論集。大江健三郎、大西巨人、金井美恵子についての評論と時評が収められている。資本主義、民主主義、天皇制の三位一体からなる（と、絓が判断する）戦後日本社会に対する政治・経済的な批評が中心だ。

ここでは絓の**批評**のスタイルについて紹介したい。思うにその大きな魅力は、膨大な読書量に裏打ちされたテクストの精緻な読みと、そのラディカルな提示の仕方にある。六八年の全世界的な学生運動を思想的背景にもつ絓は――『**革命的な、あまりに革命的な**』という単著さえあるほど――つねに**革命**を念頭に置いた批評を行う。例えば本書では、「レーニン的な「真理」が宙に吊られた時に可能な、資本主義社会への革命的な批判の、ありうべきあり方」を初期の金井美恵子に見出す（その意味するところは本書を繙いてほしい）。ラカンやヘーゲルの思想を主軸とした絓の批評は時にきわめて難解だが、本来ありえないもの同士が結びつくスリリングな理路を味わえるのが、絓の批評文の大きな醍醐味だろう。

とはいえこうした絓の手つきは、ややもすれば偏執的（考えすぎ）とさえ言えるほどだ。しかし、考えすぎであるがゆえに、その批評は危険な魅力を帯びている。それは、われわれには知覚しえない無意識さえを問う文学の読みを、絓が遂行しているからに他ならない。

絓曰く、革命はもはや不可能であるらしい。それがなぜ、どう不可能なのか、不可能はどう可能となるのか。本書は、この問いに対する遅々とした歩みの足跡でもある。（倉井）

（三三六頁　税込二七五〇円　9月刊）

イスラエル・パレスチナ紛争をゼロから理解する

イラン・パペ著　早尾貴紀監、広瀬恭子／茂木靖枝訳　河出新書

二〇二三年一〇月七日以降、我々は衝撃的な映像と情報をSNSやニュースを介して目撃することになった。これらは一般的にパレスチナ／イスラエル問題と呼ばれ、その対立の歴史はイスラエル建国以前の一九四七年まで遡る。一言で表すならば、本書はこの問題の基本的歴史認識をまとめた内容である。

シオニズムを根本から批判するイスラエル生まれの歴史家イラン・パペは、イスラエルにおいては「非国民」だと認識されている。監訳者解説では、彼が在職してたイスラエルのハイファ大学からも冷遇され、イギリスに移住したという背景についても触れられる。

そんな著者は、日本のメディアでも報道されている「ハマスがテロの始まり」「イスラエルの自衛戦争」などの認識を批判している。これらの政治的プロパガンダは、シオニズム運動の始まりから行われてきたパレスチナの民族浄化の一段階であるという。民族や宗教による様々な考え方の違いに言及しながら、ユダヤ人が権力を持った背景を歴史的な流れの中でわかりやすく解説する。（プラチ）

（二〇八頁　税込二一〇〇円　12月刊）

読む技法

伊藤氏貴著　中公新書

討論をしていて意見が食い違い、不毛な揚げ足取り合戦をしてしまったことはあるだろうか。その原因は「読解力」、すなわち「書き手の『意図』を汲み取る力」の欠如にあるかもしれない。それは誰かとの議論だけでなく、本を読むときにも必要なものである。文字の書き手と読み手が持っている背景はえてして異なるものだ。問題はその事実を無視して独りよがりな解釈をし、読めた気になってしまうことである。

本書の目標は書き手の意図を汲み取る力を身につける事である。そのための技法を、実際に文章を読みながら教えてくれる。例えば著者は、ある文章を理解しようとする際、その著者の別作品や別の人が書いた同テーマの文章を読むことを推奨する。大石誠之助に関する二人の詩を読みながら、書き手の意図を掴みにいく解説はとても面白い。

著者が挙げる手法を全て実践していくのは大変に思えるが、それを乗り越えてこそ真の理解に辿り着けるのかもしれない。私の読解力訓練も始まったばかりである。（竹輪）

（二六四頁　税込二一〇〇円　11月刊）

倫理思考トレーニング

伊勢田哲治著　ちくま新書

日常においてわたしたちが討論するとき、意見が食い違うのは得てして事実そのものではなく、善悪や価値判断といったものの見方、すなわち倫理についてである。本書はこうした食い違いを整理し、より建設的な討論の方法を提案する一冊だ。そのために著者はそもそも倫理とは何かというところから話を始める。善悪は客観的に決められるのか。道徳とはフィクションに過ぎないのか。本書のおよそ半分を占めるこうした議論は充実の内容で、ここだけで倫理学入門として読めるほどだ。

しかし本書の本領は後半にある。なぜ対話が成立しないのか――。とりわけ「多対多の論争における食い違い」についての分析は、SNS上で真っ当な議論を難しくさせる構造が見事に整理されており出色である。もっとも、こうした分断に対して本書は魔法のような解決を示すわけではない。提案されるのは地道な擦り合わせの方法であって、分かり合えないひとと、われわれはすこしずつ歩み寄るほかない。しかし少なくとも、冷笑や絶望に陥るよりずっとマシなはずだ。（水炊き）

（四四八頁　税込一五四〇円　9月刊）

写真ド素人　写真論を読む

先日、カメラを買った。カメラを買うのは初めてだったから、手元に届いたら嬉しくなって、何も考えずにパシャパシャと周りのものをひたすら撮っていった。撮ったものを見てみるとなんだかいい感じに撮れている。悪くない。しかし徐々に気になってきたのはまさにそこだった。つまり何も考えずとも、とりあえず指を少し動かせば写真が「撮れてしまう」こと、そこに不安を感じるようになってきたのだ。「こんな簡単に撮れてしまっていいんだろうか……」。

だとすれば気になってくるのは、写真を撮るとき、そして写真を見るときに、私はどのような態度でそれに臨めばいいのか、ということである。写真を撮るとき私は何を考え、写真を見るとき私はどこを見ればいいのか――それを知るために、写真ド素人の私は何冊かの本を手に取った。今回はそのうちの二冊を紹介したい。

＊

一冊目はいわば「見るとき」に関する本、言わずと知れた名著の、ロラン・バルト著『**明るい部屋**』（みすず書房）である。本書を語るうえではやはり「ストゥディウム」と「プンクトゥム」の区別は外せない。「ストゥディウム」とは、写真にたいする一般的・文化的な関心、たとえば歴史や政治といったコードから写真を読み解く態度のことである。一方「プンクトゥム」とは、そうした読みを揺さぶるもの、写真から「矢のように発し、私を刺し貫きにやって来る」コード化されていない細部のことである。たとえばある黒人家族を写した写真があるとして、彼らが白人の衣服で着飾っていることから、そこに社会的上昇の努力を見て取るのは「ストゥディウム」的な読みとなる。しかしそうした読解から逸れて、その家族のひとりが身に付けているベルト付きの靴になぜか目が釘付けになるとき、それは「プンクトゥム」的な読みとなる。「プンクトゥム」は撮影者も意図しなかった偶然的な要素であり、それゆえそれは私を突き刺し、掻き乱す。そしてバルトはこの「プンクトゥム」に何か本質的なものを見出すのである。本書の卓見はこの区別に尽きないが、写真の魅力を考えるうえでこの区別は今でも有効だろう。

＊

二冊目は「撮るとき」に関する本、ルイジ・ギッリ著『**写真講義**』（みすず書房）である。イタリアの写真家である彼のことを、私は『須賀敦子全集』の表紙に使われた写真「モランディのアトリエ」で知った。それは本当に美しい写真だった。本書はその彼の講義を文字起こししたもの。「写真に新しいことなんて何もない、いつの時代の人間も、世界を眺めるこの方法を知っていたのだから」と語るギッリの写真、その画面はいつも静かで、言ってしまえば平凡なものも少なくない。しかしそこには吸い込まれるような美しさがある。ギッリは語る――この世界の神秘は「意図的にそうしようとするより、普通に撮っているときの方が見つかるものです」。奇抜な創作をするより、「人々の記憶、思考、関係性のなかに隠れているものを引き出す方が面白いと私は思うのです」。こうした考えに私は共感する。そしてバルトやギッリの言葉、もちろんカメラも携えて、私は外に出かける。

（はや）

「民主主義」の崩壊

民主主義とは何なのか――。そんな大きく漠然とした疑問を抱き始めたのは、二〇一六年十一月に行われたアメリカ大統領選挙であった。開票の様子をテレビで観ながら、得票率に大きな差がない、つまりは過半数に近い人々はドナルド・トランプが大統領になることを望んでいないにもかかわらず、彼が大統領になる意味が理解できなかった。マイノリティの主張は通らない、あるいは軽視される。少数派の数が多数派とそう変わらなかったとしても、完全に無視されてよいのか。このような選挙は、果たして民意を反映していると言えるのだろうか。民主主義とは何か。そして、いわゆる理想とされている「民主主義」は、すでに崩壊しているのではないか。

現在、多くの国が何らかの形で「民主主義」を採用している。しかし、「アメリカ合衆国におけるトランプ政権の成立やヨーロッパ諸国での極右政党の躍進、（中略）インドにおける民主的手続きによって成立した政権の権威主義化」が民主主義の危機を示している。これらは冷戦終結後に進展した新自由主義的な世界経済の発展により展開されたと考えられている。そんな民主主義の危機が、タイトルにある三つを理由とするという観点から分析しているのが『**民主主義の躓き――民衆・暴力・国民国家**』（**東京大学出版**）である。

本書で述べられている内容は、特定の一国における民主主義、あるいは複数の国を比較して述べられている従来の民主主義論とは大きく異なる。筆者は現在先進的な民主主義であると認知されている多くの国々は元々帝国主義国家、つまり植民地を持っていたことを指摘する。そのような前提を改めて踏まえた上で、暴力的な側面、そして国際関係的な視点が求められることを強調する。そこで、本書は国際関係論、地域研究、社会学の多数のディシプリンを跨いで、民主主義の抱える三つの問題点に踏み込んでいる。本来は「民衆の自己統治」に依拠して、民意を反映しているはずの民主主義体制下で必ずしもこれが達成されていないこと。民主主義体制が暴力や排除を生み出す原因にもなっているということ。そして、国民の定義とその包摂範囲に限界があるということを指摘する。

そんな民主主義の崩壊が新自由主義、つまり、権力者にとって理想的な利益と結びつくことに起因すると述べているのが『**いかにして民主主義は失われていくのか**』（**みすず書房**）である。民主主義は「権力が少数の者のためでなく多数の者のために行使される可能性（中略）を、担保なしで提供している」ものであるという。しかし、常に社会における支配的なものにコントロールされてしまうという理論と現実の矛盾が生じていることを前提にしている。本書では、あくまでも民主主義と新自由主義を結び付けた上で、現代社会の問題提起をしているに過ぎない。しかし、訳者も述べているように、新自由主義が我々に与えた影響を知ることこそが、新自由主義との闘いの出発点となるのだろう。

この二冊は、民主主義は現在、人民全体が統治するべきであるという本質を失いつつあり、その理由は新自由主義的経済が拡大したためであるという共通認識を持つ。この基本的な認識、つまり民主主義の限界は、多くの人々が肌で感じているだろう。民主主義とは何であるのか、それは今どのように失われているのか、そして次に何が起こりうるのか。なんとなく感覚ではわかっていることが、わかりやすい軸に基づいて明文化されている。

（**プラチ**）

編集後記

10月末ぐらいから急に寒くなりましたね。毎年いつまで薄着で耐えれるかなと無駄なチャレンジをしているのですが今年は呆気なく降参。今は暖かい服装でぬくぬく過ごしています。

ここ最近は修論のための計算をガリガリしていましたがそれも山場を越え、なんとか完成しそうです。あとは事務的な手続きを問題なく終えれば無事卒業といったところでしょうか。安心しきるのはまだ早いですが、少しは気が楽になりました（と思っていたら結構な量の修正点が見つかって焦っています）。そして春からは社会人として、東京での生活が始まります。とても楽しみではあるのですが、以前東京に少し住んでいた時、建物がびっしり詰まっているのを見て息苦しさを感じた記憶があるんですよね。うまく順応できるかな……

最後に。短い間でしたが、綴葉編集委員会の皆様には大変お世話になりました。貴重な体験をさせていただきました。普段は接点のない人と関われるというのは非常に素晴らしいことです。これからも人との関わりを大切にしながら生きていこうと思います。そしてもちろん、読書も続けていきたいですね。読書、良い習慣です。（竹輪）

当てよう！ 図書カード

今月の馬特集で扱ったフォークナーですが、彼はアメリカ南部に終生住み、自らが住む土地を舞台に小説を書き続けました。かれは何州に住んでいたでしょうか。

1. テキサス州　2. ミシシッピ州
3. ルイジアナ州　4. アラバマ州

（コーク）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは3月15日です。

《10月号の解答》 10月号の問題の正解は、2.の丸善でした。五感で檸檬を感じさせてくれる実にカラフルな小説です。青空文庫で読めるので是非読んでみてください。図書カードの当選者は、音楽理論面白いかもさん、いぐあらすさん、いわさん、青でんぶさん、ルービックキューブさんの5名です。当選おめでとうございます。

（竹輪）

読者からひとこと

○秋ですね（大学院・ルービックキューブ）
○秋の本特集がみたい!!
（理学研究科・えび天天）

――コメントありがとうございます！　秋でしたね。秋の本で思いつくのは恒川光太郎『秋の牢獄』（角川ホラー文庫）や宮本輝『錦繡』（新潮文庫）といったところでしょうか。他の方はどんな本を思い浮かべているのでしょうか。そんなことを考えるだけでもなんか楽しいですね。

○SF特集をやってほしいです！
（理学部・おもち）

――コメントありがとうございます！　SF良いですね。次に特集案を出す機会があれば全力で推していきたいと思います。ところで『プロジェクト・ヘイル・メアリー』、まだ読めていないんですよね……。周りの人たちが絶賛しているから一体どれだけ面白いんだと、そのうち読もうと思ってはや二年。気付けば映画になっているではありませんか。流石にこれ以上先延ばしにしたら一生読まない気がするので何としてもこの冬に読んでおきたいです。あわよくば企画などで取り上げたいと思っています。（竹輪）